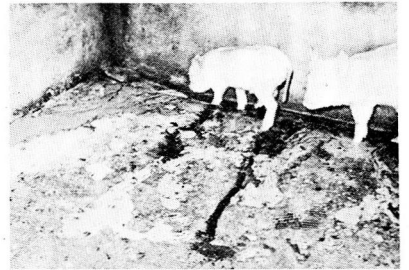


豚の病気のいろいろ VII

ウイルス

伝染性胃腸炎 (TGE)

冬季になると毎年広い地域にわたって、水様下痢を主徴とする豚の伝染病が流行する。一つの養豚場で発生すると、1週間ぐらいのうちに哺乳豚から成豚にいたるまですべての年齢の豚が発病する。このような冬季の下痢に伝染性胃腸炎(TGE)がある。水様下痢は本病の特徴で、便の色は灰白ないし黄色で次第に帯緑色となる。下痢のほか、食欲不振や嘔吐がみられる。激しい下痢のため脱水状態となり体重が減少する。哺乳豚の死亡率は生後10日以内でもっとも高くほとんど100%、11~20日齢で60%、21~45日齢で30%、46~90日齢で5%くらいである。90日齢以上になると1~7日間下痢がつづいたのちほとんど回復する。



水様のはげしい下痢

胃腸炎の名が示すように本病は症状のうえからも、また解剖してみても、おもに消化管がおかされる病気である。したがって変化は主として小腸と胃にみられる。胃は不消化の食餌をいれて膨満し、粘膜面ごとに大弯部に潮紅糜らんがみられるが、これは嘔吐をしめす豚に多くみられる。

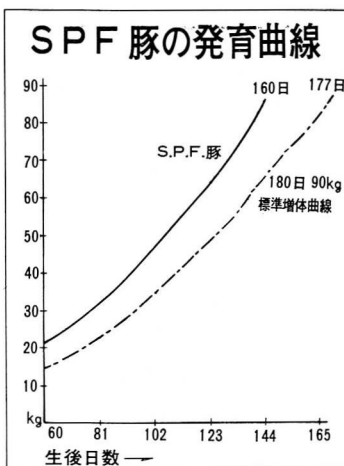
感染豚の小腸は健康豚の小腸に比べて、腸壁が薄くなり、弛緩し一般に貧血している。また健康豚の小腸は解剖してみると内腔はほとんど空虚であるが、感染豚では少量の固形物をいれた黄色透明の液を満たしている。

健康豚の小腸粘膜面を露出し、拡大鏡でみると絨毛がよくのびているが、TGE感染豚では絨毛が短縮して粘膜面が平坦になっている。絨毛が短くなると消化吸収の機能が悪くなり、大腸の水分吸収もまに合わず、豚は下痢をする結果となる。小腸粘膜を蛍光抗体法で染色すると、特異蛍光が絨毛表面を覆う上皮細胞層にみられ、TGEウイルスの増殖が証明される。

有効なワクチンは未だない。予防対策として一般衛生管理に注意し、ウイルスを豚舎内にもちこまないようにすることである。本病は導入豚による伝播が多いので隔離観察をし、抗生物質やサルファ剤は細菌の二次感染による疾病の悪化を抑圧するために投与することは効果があるがなるべく早期にむしろ予防的に用いたほうがよい。

SPF

SPF豚とは特定の病気や病原体たとえば流行性肺炎(SEP)、萎縮性鼻炎(AR)、豚赤痢、トキソプラズマなどをもっていない健康な豚をいう。したがってどんな品種の豚でもSPF化することができる。最近豚肉の需要が急速にのびてきたところから養豚も企業化、多頭化の傾向にあるが、それに伴って前述のような症病が複合的に侵淫し、その生産性をいちじるしく阻害している。たとえば多頭肥育の場合その飼料要求率が4.0~5.0と数年前のそれに比較してきわめて悪化している。そこで今後の企業養豚では病気がない安心して飼育できることとともに、それによって飼料代が節約できることが要求される。この要求に応じて開発されたのがSPF豚である。SPF豚による養豚法は主として米国のネブラスカ州ですでに十数年にわたって行なわれ大きな成果をあげている。わが国でもこれの実用化はすでに始まろうとしている。



肥育用SPF豚の発育はきわめて良好で、現在の標準増体量180日90kgをはるかに上回る、平均160日90kgである。

SPF豚の育成成績

区分	第一次SPF豚			第二次SPF豚		
	所要日数	1日平均増体量	飼料要求率	所要日数	1日平均増体量	飼料要求率
20kgまで	70日	270g	—	56日	335g	—
前期						
20kg~50kg	41	720	2.4	41	720	2.4
後期						
50kg~90kg	55	750	3.5	55	750	3.5
全期						
20kg~90kg	166	730	3.0	152	730	3.0
背脂肪	2.0cm内外			2.0cm内外		
枝肉歩留	70%内外			70%内外		

SPF肥育豚のいままでの成績では飼料要求率3.0、平均1日増体量730gなど、従来(Conventional)のものに比較してきわめて良好である。